

市川様

光学天文連絡会

GROUP OF OPTICAL AND INFRARED ASTRONOMERS (GOPIRA)

会 報

No. 45

1987-6-20

光学天文連絡会事務局(東京天文台岡山天体物理観測所)

第01巻 光学天文連絡会昭和61年度会計報告(4月30日現在) 第01巻 . I
発行 青柳出 幸翁田平: 発刊 光学天文連絡会

目次 (林田) 青柳出 幸翁田平: 発刊 光学天文連絡会 第01巻 . I-1

会費 391、会費懸・会費 (I)

I. 第10回総会報告 1986年12月13日 東京 1987年1月10日 東京 1987年2月10日 東京 1987年3月10日 東京 1987年4月10日 東京 1987年5月10日 東京 1987年6月10日 東京 1987年7月10日 東京 1987年8月10日 東京 1987年9月10日 東京 1987年10月10日 東京 1987年11月10日 東京 1987年12月10日 東京

I-1 1986年度会務報告及び会計報告 2

I-2 1986年度活動報告(運営委員会) 4

同 補足・東京天文台ワーキンググループ状況報告 6

同 補足・東京天文台改組準備調査委員会会合メモ 7

合計 7

I-3 各ワーキンググループ報告 8

1) 望遠鏡ワーキンググループ報告 10

2) 体制ワーキンググループ報告 10

3) ユーザーズ・コミッティ報告 10

4) 国際協力ワーキンググループ報告 11

I-4 1987年度委員の選出と承認 11

I-5 1987年度事務局の承認 11

I-6 1987年度活動方針 12

II. 第43回運営委員会報告 13

III. 運営委員会懇談会メモ 15

IV. 第44回運営委員会報告 16

V. 会員移動 17

VI. 掲示板 17

1) シュミット・シンボ、技術シンボ、岡山ユーザーズミーティングのお知らせ

2) 東京天文台の構想素案の配布について

3) 会費納入のお願い

I. 第10回総会報告

1987年5月12日 京大会館において日本天文学会春季年会初日終了後A会場で、第10回総会が開かれました。議長：平田龍幸 出席者 34名

I-1. 1986年度会務報告および会計報告 (田村)

項目	年月日	会場	人数
1) 総会・懇談会			
第9回 総会	1986年 5月13日	府中市市民会館	151名
懇談会	1986年10月22日	高知市高知商工会館	約40名
2) 運営委員会			
第39回 運営委員会	1986年 6月24日	東大理学部天文学教室	14名
第40回 運営委員会	1986年11月15日	東大理学部天文学教室	9名
第41回 運営委員会	1987年 1月21日	東大教養部 102号館	14名
第42回 運営委員会	1987年 3月10日	宇宙研 45号館	11名
第43回 運営委員会	1987年 4月21日	東大理学部天文学教室	12名
運営委員会 懇談会	1986年12月12日	宇宙研	9名
3) 専門委員会、WG			
体制WG	1986年 6月24日	東大理学部天文学教室	8名
体制WG	1986年10月 1日	東京、学士会館	7名
体制WG	1987年 1月 6日	東大理学部天文学教室	12名
体制WG 懇談会	1987年 2月 4日	京大理学部宇宙物理学教室	10名
ユーザーズ・コミッティ	1986年 9月 5日	木曾福島、木曾郡民会館	17名
望遠鏡WG	1986年10月 2日	東大理学部天文学教室	22名
4) ワーク・ショップ、シンポジウム			
体制ワーク・ショップ	1986年 9月 6 ~ 8日	木曾福島、青雲荘	15名
光天連シンポジウム	1987年 1月22 ~ 23日	東京天文台	62名
岡山ユーザーズミーティング	1987年 9月30 ~ 10月1日	東大総合図書館	56名
天文学に関する技術シンポジウム	1986年 9月 3 ~ 4日	長野県林業高等学校	62名
シュミット・シンポジウム	1986年 9月 5 ~ 6日	木曾郡民会館	54名
5) 要望書			
1986年 9月25日	会報 No.42, 13ページ	"岡山観測プログラム2期制"	
1986年11月20日	会報 No.43, 4ページ	"国立研連絡協議会 連絡小委員会の設置"	
1987年 2月23日	会報 No.44, 19ページ	"国立研の規模と組織、 国立研の運用と共同利用体制"	
6) 会報・パンフレット			
会報 No. 40	1986年 6月24日		
会報 No. 41	1986年 7月29日		
会報 No. 42	1986年10月15日		
会報 No. 43	1986年12月15日		
会報 No. 44	1987年 3月30日		
大型光学赤外線望遠鏡計画 Q and A	1986年11月		
7) 会員名簿	1987年 2月10日	229名	
8) 運営委員選挙	1987年 3月10日	92人投票、920票	

光学天文連絡会昭和61年度会計報告(4月30日現在)

収入			
前年度繰り越し			74,393円
会費			391,500
内訳			
昭和60年度以前	(17口)	31,000	
昭和61年度	(186人)	333,500	
昭和62年度以降前納	(14口)	27,000	
合計			465,893
支出			
印刷費			256,700
内訳			
会報 No.40		29,800	
会報 No.41		21,500	
会報 No.42		23,000	
会報 No.43		24,300	
会報 No.44		29,800	
会員名簿・選挙関係		32,800	
JNLT Q & A		95,500	
郵送料			141,080
封筒			8,960
のり			320
会合費(光天連シンボ)			3,298
宅配便(京都一仙台)			1,500
振替払込料金加入者負担			4,145
合計			416,003
繰り越し残高			49,890
会費納入状況	昭和61年度	前納	3人
		当年度納入	186人
		未納	40人

昭和61年度 光学天文連絡会 活動報告

運営委員会

1. 全般的経過

第9回総会(1986年5月13日)において採択された光学天文連絡会の1986年度活動方針は

- (1) 全国共同利用体制の具体的検討
- (2) 大型望遠鏡の最適化及び関連機器の検討
- (3) 建設地点の検討
- (4) 大型望遠鏡完成までの期間における観測、研究体制及び補助望遠鏡の検討

であった。この方針にそって各項目の具体的検討が進展し、JNL T計画の実現に向けての第一歩が開始された。とくに共同利用研究体制の基本となる東京天文台の国立大学共同利用機関への改組の調査検討が正式に開始されたことにより光天連の活動も新しい段階にはいった。ワーキンググループ、ワークショップ、シンポジウムなど大小規模の会議が頻りに開かれ、当面する問題点、将来への展望などが次第に浮き上がって来た。

以下、主な事項について1986年度の経過をまとめる。

2. 研究体制

(1) 全国共同利用体制

天文学全般の研究体制の整備を目標にして、東京天文台、緯度観測所、名大空電研の一部、を国立大学共同利用機関(以下国立研)に改組するための調査費概算要求が提出され上記機関および天文研連などにおいて検討が進められた。光天連では光学赤外線天文学の立場から体制ワーキンググループが主体となって検討と意見のまとめを行なった。とくに体制ワークショップ(9月6-8日)、光天連シンポジウム(1月22-23日)において議論が進んだ。その結果は光天連からの要望書として11月20日及び2月23日に東京天文台長宛て運営委員長名で送られた。これらは新しい国立研が実質的また効果的に全国共同利用の中核となるための取り組み方及び基本方針に関連するものである。改組の調査費は認められ、4月から東京天文台内に改組準備調査室が設けられると共に、台外委員を含めた改組準備委員会が発足した。これによって新しい段階での調査検討が始まることになった。

(2) 岡山・木曾の有効利用について

懸案となっていた岡山・木曾のプログラム編成についてユーザーズコミッテイ(9月5日)での検討がおわり、岡山プログラムの年2期制について9月25日に東京天文台長宛て要望書をおくった。それをうけて東京天文台での検討が進み12月には年2期制への移行を織り込んだプログラム公募が行なわれた。また1月29日には岡山・木曾プログラム相談会が開かれ、プログラム編成、当面の機器整備計画などについて話し合いが行なわれた。

(3) 大学における施設整備、研究教育の充実

東京天文台の国立研への移行に伴い東大理学部における研究教育の整備充実が大きな問題となって来た。東大からの計画案ではサブミリ望遠鏡、中口径赤外線望遠鏡計画の他、木曾観測所を東大に残す案も含まれているので、光天連としてはそれによって全国共同利用のレベルが低下することのないよう強く要望を行なった。

機関望遠鏡としては京都大学(付属天文台、物理学教室、宇宙物理学教室)において中口径光学赤外線望遠鏡の検討が始まった。東北大学においても実験施設及び講座増を主とする整備計画が構想されている。

3. 望遠鏡の技術的検討と建設候補地調査

JNL Tにかんする技術的検討及び候補地調査は東京天文台望遠鏡ワーキンググループが中心となって進めており、その会合は本年3月で140回に達している。光天連としては望遠鏡ワーキンググループが中心となって次のような活動を行なった。

(1) 望遠鏡及び観測機器

光天連望遠鏡WGは10月2日にワーキンググループの会合を開き、東京天文台の「大型光学赤外線望遠鏡技術調査報告書」にたいするクリティカル・レビューを整理し、とくに

1. 口径7.5mの妥当性について
2. 解像目標0.1秒について
3. 主鏡の方式について(ハニカム鏡と薄メニスカス鏡の比較)
4. 技術面における国際協力について

などの項目についての検討を行なった。その結果は東京天文台望遠鏡WGにより「CRITICAL REVIEWに関連するJNL T Q&A」としてまとめられた。

また、機器開発の検討について望遠鏡WGは11-12月にアンケート調査を実施し、その結果は光学及び赤外についてそれぞれ光天連シンポジウムで報告された。

(2) サイトテスト

ハワイ大学との協力の下にマウナケア山頂の建設予定地の調査が進展し、12月には予備調査が実施された。昭和62年度の海外学術調査によるサイトテストが認められたので現在その準備が進んでいる。

4. 国際協力・海外観測

(1) 東京天文台とハワイ大学との折衝

MOU(Memorandum of Understanding)が8月に取り交わされ、OSDA(Operating and Site Developing Agreement between the National Astronomical Observatory of Japan and the University of Hawaii Concerning the Design, Construction and Operation of the 7.5 meter Japanese National Large Telescope on Mauna Kea, Hawaii)の第一次文案がハワイ大学から提示された。これは建設及び運用に関する基本的取り決めになるので、国際協力WGにおいて検討が進められた。現在、日本側の意見を基にハワイ側との折衝が進んでいる。

(2) 海外との技術に関する情報交換

JNL T建設については海外の多くの天文台や関連機関が注目しており、問合せや情報交換の申し出が続いている。これまでも中国、ESO, UK(SERC), NOAO, ワシントン大学、ジョンズホプキンス大学などからのコンタクトがあった。

(3) 海外観測

本年度は海外学術調査として石田班(ハワイ)と西田班(チリ)がそれぞれ観測を実施した。そのほかにも研究交流計画に従って多くの海外観測及び国際協力が行なわれた。

5. 広報活動

「大型光学赤外線望遠鏡 Q&A」(31ページ)を11月に印刷配布した。

4. 技術部について

技術系職員の現況について東京天文台の現況が紹介され、新しい国立研における「技術部」のあり方について議論された。基本的な視点として、技術業務の円滑な進行である。処遇については技術の教職への移行が最も望まれているべきであるという方向で議論が進んだ。「技術部」についての検討は更に継続されることになった。

東京天文台ワーキンググループ状況報告

東京天文台の「国立研」への改組のための調査費が認められ、4月から調査室と調査委員会が設置され、具体的調査を開始した。東京天文台将来計画委員会により教授会に提出された「国立研」の「構想素案」には装置計画にJNL Tの建設が記され、国内諸観測所を含む光学赤外天文分野に対応して、光学赤外線天文学研究系の設置が提案されている。このような状況にあつてJNL Tのための調査費概算要求を、昭和63年度単年で出す方針で準備が行われている。技術検討については下記の如く科研費を中心に工夫をして実質的な調査が急速に進んでいて、現在光学模型実験の段階にあつて仕様を定める準備に入っている。また建設候補地でのサイトテストは、5月下旬に田鍋、安藤、野口の第一陣が出発し、野口が6~7月、次いで宮下が8~9月、中桐が10~11月の観測を担当する。テストは30mの塔に設置する微熱乱流計による計測が中心で、これによりドーム高などを決定する資料やシーイング関連の資料を得ることができる。ドーム自体の風洞実験は京大理と防災研の協力で行う準備が進んでいる。

大型光学赤外線望遠鏡 (JNL T) 計画の経緯

- 1978 日本学術会議天文学研究連絡委員会にて光学赤外線天文学将来計画の具体的検討を開始。
- 1980 全国関連研究者の連絡会発足。
- 1984 関連研究者によるJNL T計画案策定。東京天文台教授会による調査開始決定。
- 1985 日本学術会議天文学研究連絡委員会によるJNL T計画推進決議。
- 1986 JNL T技術調査報告に基づくクリチカルレビュー。東京天文台・ハワイ大学間の覚書交換。
- 1987 国立研・ハワイ大学間の協定原案の検討。

JNL T技術検討調査経過

- 1980-83 候補地地質・地形・気象資料解析
- 1984-85 大型鏡製造研磨調査
- 1984-86 主鏡の熱・力学特性解析
- 1984-86 軽量鏡体の試作
- 1985-86 山頂模型による風洞実験
- 1985-86 ドーム熱構造実測実験
- 1985-86 ACCOS-Vによる光学系設計
- 1985-86 有限要素法による構造解析
- 1985-86 微熱乱流測定実験
- 1986-87 能動支持機構の工学模型実験
- 1987 ドーム構造風洞実験
- 1987 建設候補地点サイトテスト
- 1987-88 高性能分光器光学系の開発
- 1987-88 能動制御系の工学模型実験

東京天文台改組準備調査委員会会合メモ

本年4月から上記委員会が発足することになり、第1回会議が4月25日に東京大学で開催された。会合の要旨を次に報告する。

初めに古在会長から委員の紹介及びそれに関連して東京天文台内に設置された改組準備調査室メンバー(平山淳調査室長)の紹介があった(別表)。そのあと、委員長に古在会長、幹事に池内了氏(改組準備調査室幹事を兼ねる)を選出した。

古在会長から挨拶とこれ迄の経過報告があり、本委員会の任務として次の2点をあげられた。

- 1) 概算要求書の作成についての審議
- 2) 国立研発足までの重要事項の審議

次に東京天文台将来計画委員会が作成した「天文学の国立大学共同利用機関の設立について」(昭和62年3月30日構想素案を含む)の詳しい説明があり、それに基づいて自由討論があった。

台外委員からは主に「構想素案」の趣旨について、それが東京天文台の立場で書かれたものであり、全国の研究者による共同利用機関として設立することになった経過及び趣旨についても盛り込むことはできないかという指摘があった。

それに関連して光天連から2月に出された「要望書」についても議論があり、そのなかには現実的でない面もあるとの指摘もあったが、それについては光天連からはその「要望書」が全国共同利用の精神にもとづいて書かれたものであり、

- 1) 光学赤外線天文学の分野は伝統があり研究者が全国の大学等に広く散在している。
 - 2) JNL T計画を主体にスケールの長い見方をしている。
- などのため、すぐには概算要求に結び付かない点もあることを説明した。

「構想素案」の内容についての議論に次のようなものがあった。

- ・ 専門委員会の任務・役割について：光学赤外・太陽専門委員会というのは大きすぎないか
- ・ 主幹(総合計画、研究交流)の任務、役割、位置づけ。
- ・ 技術部についての考え方、そのメリット、デメリット。
- ・ 各研究系、研究施設の構成。

続いて改組準備調査室長および関係委員から調査室での調査検討の進行状況について説明があった。概算要求書原案の作成等具体的な作業がこの調査室で進められることになる。それに必要ないくつかのワーキンググループが置かれたことが報告された。共同利用の実務体制検討のワーキンググループには台外から名大の松本委員を推薦した。

最後に国立研の名称について 国立天文学研究所(National Institute for/of Astronomy), 国立天文台(National Astronomical Observatories), 国立東京天文台などの案が紹介された。これについては広く意見を聞いたうえで6月半ばまでに決めることになった。

今回の改組準備調査委員会は5月23日の予定である。

(文責 小暮、小平)

（委員）

- 平山 淳（分光部教授 準備室長）
- 小平 桂一（銀河系部教授）
- 海部 宣男（野辺山宇宙電波観測所助教授）
- 宮本 昌典（子午線部助教授）
- 池内 了（太陽電波助教授）
- 大江 昌嗣（緯度観測所地象観測課長）
- 緩目 信三（名古屋大学空電研究所教授）

（オブザーバー）

- 古在 由秀（東京天文台長）
- 内田 豊（東京大学理学部教授）
- 原 俊男（緯度観測所庶務部長）
- 河合 静男（東京天文台事務長）
- 田中 勇（ " 事務長補佐）
- 岩上 功（ " 業務主任）
- 高橋 博美（ " 庶務主任）
- 佐々木 勉（ " 司計係長）

東京大学東京天文台改組準備調査委員会（昭62. 4.1 ~ 昭63. 3.31）

（台外委員）

- 奥田 治之（宇宙科学研究所宇宙研究系教授）
- 小暮 智一（京都大学理学部宇宙物理学教授）
- 竹内 峯（東北大学理学部天文及び地球物理学科第一助教授）
- 松本 敏雄（名古屋大学理学部理学研究科宇宙理学助教授）
- 田原 博人（宇都宮大学教育学部教授）
- 細山 謙之輔（緯度観測所長事務取扱）
- 緩目 信三（名古屋大学空電研究所教授）
- 内田 豊（理学部天文学科天文学第二講座教授）
- 杉本 大一郎（教養学部宇宙地球科学教室教授）

（台内委員）

- 古在 由秀（東京天文台長）
- 青木 信仰（人工天体運動部教授）
- 日江井 栄二郎（乗鞍コロナ観測所教授）
- 小平 桂一（銀河系部教授）
- 海部 宣男（野辺山宇宙電波観測所助教授）

（平小 暮小 貴文）

東京天文台改組準備調査委員会（第2回会合メモ）

第2回会合は昭和62年5月23日に東京で開催された。その要旨を報告する。

古在委員長及び平山調査室長からの経過報告、及び古在台長からの5月6日に文部省で開かれた協力者会議についての報告があった。

今回の会議で議論された主な問題点は要旨次のとおりである。

1. 技術部の問題 国立研に技術者の組織として技術部を設ける必要があるかどうかについて、技官の待遇、工場との関連、工学系研究部門との関係等の観点から議論された。
2. 共同利用について 海部委員から共同利用に関するワーキンググループからの会合メモが紹介され、検討すべき事項として次の点があげられた。
 - (1) 望遠鏡の共同利用 共同利用のイメージ、具体的方針、特に共同利用旅費の確保
 - (2) 「基研型」共同利用への配慮 アトム型、モレキュル型利用形態と必要旅費
 - (3) 外部機関の研究のサポート 工場の共同利用、技術・技術者の交流、研究費のサポート（宇宙研の「基礎開発費」に対応する新しい方法）、外部機関のニーズ・研究計画・特別事業費等のアンケートの必要性
 - (4) 大学院教育 併任制度の具体的検討、64年度へ向けて大学間調整（総合大学院制度との関連で併任制度にはまだ問題の残っていることも指摘された）
 - (5) 人員交流 そのあり方と具体的方法
 - (6) 共同利用運営 研究系・施設と専門委員会との関係及びそれに関連して専門委員会のイメージについて議論が集中した（次項）
3. 専門委員会について 海部委員の報告に基づいて、古在委員「専門委員会について」のイメージ、小暮委員「光学赤外線専門委員会の構成・任務・運営（私案）」が紹介され、多くの議論があった。そのなかで専門委員会と研究系・施設との関係、とくに人事の扱い方について意見にバラエティのあることが明らかになってきた。それを要約すると
 - A 人事は運営協議員会議（以下運協と略称）で人事委員会等を通じて扱い、個別的専門委員会は人事に関与しない。
 - B 人事の基本方針（ポストの使い方、配分等）は運協で定めるが具体的人事は各分野（個別的専門委員会）にその選考を委ねる。それに基づいて運協は決定する。
 という2つの極端な考え方があり、それらの得失及びその中間的扱いについて種々の問題が議論されたのである。

4. 地方大学の関心事 田原委員から国立研以外の大学・研究機関、とくに「地方」大学の研究者にとっての主要関心事がどこにあるか—例えば サービス（観測、図書文献、計算）や地方のレベルアップ—についても十分配慮すべきことが指摘された。

今回は6月13日に東京で開催される。 (文責 小暮)

なお、調査委員会のあと、共同利用ワーキンググループが開かれ、共同利用に関するアンケートを実施することになった。アンケート文案の作成は田原、小暮委員に委嘱された。

1-3. 各ワーキンググループの報告

1) 望遠鏡ワーキンググループ報告

'86年度ワーキンググループの活動としては、東京天文台で進められている技術検討の経緯・結果の中間的なレビューの会を持った('86-10-2; 会報42号参照)。東京天文台でまとめられた「技術調査経過報告書」に対する有識者のクリティカルレビューに基づいて問題点を整理し、特に、ミラーの方式と光学精度・総合精度、更にコスト最適化及び国際協力の可能性等について検討を行った。それらの検討をもとに、東京天文台作業グループによる「JNL TのQ&A」がまとめられている。

一方、望遠鏡計画の中で、観測機器の検討が、本ワーキンググループのこれからの主要な課題になるとの認識で、光学・赤外線観測装置の疑似公募<PAO>を実施した。その結果については、'87年1月の光天連シンポジウムにおいて、光学は辻が、赤外線は舞原が報告を行っている(集録参照)。

尚、質疑において、今後ワーキンググループを中心に、観測機器の検討・選定・開発の体制とそれらのタイムスケール等について、具体的な計画の策定のステップに進む必要性が指摘された。(文責: 舞原)

2) 体制WGの活動報告

体制WGは、国立大学共同利用機関としての国立天文台が、全国の天文学研究の発展、共同利用の推進、JNL T建設・運営などについていかにあるべきか種々検討し、体制ワーク・ショップを催し、そのレジメを発表すると同時に(会報No43,5ページ)、2回にわたる東京天文台長への要望書の原案作りをたずさわってきた。また、国立天文台の全般的運用体制、JNL T関連の部門、観測機器の開発体制の具体案作成のため、東京天文台の関連研究者と意見を交換してきた。近い未来に実現してほしい事項として (1) 岡山・木曾をはじめとする既存観測所の充実、(2) 画像処理解析が可能となるデータ解析センター、およびその地域センターの設置などについても東京天文台長へ要望した。

(文責: 若松)

3) ユーザーズ・コミッティ報告 (前原)

「岡山観測プログラムの年2期制」を実現した。昨年度までの議論を引き継ぎ、東京天文台への要望書が提出された(9月25日)。ユーザーズミーティング(9月30日、10月1日)を契機として東京天文台の迅速な対応があり、プログラム相談会(1月29日)で年2期制の導入が承認された。なお、今年度は移行に伴い、4~12月期のプログラム編成が行われた。(会報42-44)

海部 宣男 (野辺山宇宙電波観測所助教授)

4) 国際協力ワーキンググループ報告 (寿岳)

1986年度に行われた国際協力

1. 日英協力: 海外学術調査「ミリ波・赤外線国際共同観測によるコンパクト天体の研究」(代表者: 海部宣男)のべ13名出張
2. アメリカ(ハワイ): 海外学術調査「マウナケア天文台における銀河と銀河系の構造の観測的研究」(代表者: 石田恵一)のべ18名出張
3. チリ(セロトロロ、ロシア): 海外学術調査「チリにある天文台における観測に基づく銀河の活動性と衝突に関する研究」(代表者: 西田稔)のべ6名出張
4. オーストラリア: 海外学術調査「気球による宇宙空間物理学的諸現象の調査研究」(代表者: 西村純)のべ7名出張
5. アメリカ(ハワイ): 海外学術調査「ハワイ島マウナケア山頂北西地域における天文観測条件の調査研究(予備調査)」(代表者: 成相恭二)
6. 日仏セミナー(仙台): 学術振興会(代表者: 小平桂一)
7. 日本・インドネシア: 学術振興会・DGHE(代表者: 石田恵一)
8. エジプト(ヘルワン): 国際協力事業団 2名出張

1987年度に行われる国際協力

1. アメリカ、オーストラリア他: 海外学術研究「恒星外周圏の構造に関する観測的研究」(代表者: 小暮智一)
2. アメリカ(ハワイ): 海外学術研究「ハワイ島マウナケア山頂北西地域における天文観測条件の調査研究」(代表者: 成相恭二)
3. アメリカ(ハワイ): 海外学術研究「マウナケア天文台における銀河と銀河系の構造の観測的研究(研究総括)」(代表者: 石田恵一)
4. チリ(セロトロロ・ロシア): 海外学術研究「チリにある天文台における観測に基づく銀河の活動性と衝突に関する研究(研究総括)」(代表者: 西田稔)
5. 日英協力: 学術振興会(1986年度の1.の継続)

1-4. 1987年委員の選出と承認

- 1) 運営委員は会報 No.44 記載の通り承認された。
- 2) 運営委員長は、小暮智一氏を選出した。

3) 各WGのメンバーは、13ページ43回運営委員会報告記載の通り承認された。

1-5. 1987年事務局の承認

各W 東京大学東京天文台岡山天体物理観測所が引き受けることが承認された。

望遠鏡WG: 田中済(O)、舞原俊彦(O)、小暮智一、山崎真一、佐藤隆二、山崎真一

国際協力WG: 寿岳(○)、田村真一(○)、家正剛、磯部清三、石田恵一、大暮謙、小暮智一、小平桂一、佐藤隆二、山崎真一

昭和62年度 活動方針

光学天文連絡会第10回総会

1. 活動の目標

光天連を中心とする関連研究者によって提案された大型光学赤外線望遠鏡計画の実現に向けて、東京天文台を国立研に改組するための調査検討が正式に開始された。このような状況を踏まえ、本年度は次のような活動に重点をおく。

- (1) 全国共同利用体制及びハワイ観測事業の具体的検討
- (2) 大型望遠鏡の仕様案及び関連機器の選定について提案
- (3) 建設候補地点におけるサイトテストの推進
- (4) 大型望遠鏡の完成までの期間における観測・研究体制及び補助望遠鏡の検討

2. 活動計画

イ) 総会、運営委員会の開催及び会報発行

ロ) シンポジウム、研究会などの開催

(1) 光天連が主体となって行なうもの

A) 光天連シンポジウム

大型光学赤外線望遠鏡による具体的な研究課題、望遠鏡の仕様、観測装置、運用体制などの検討を主に、海外観測、国際的技術協力の推進などを含め、1988年1月頃の開催を予定する。

B) 各種ワークショップ

各WGが計画・組織する。主な課題は望遠鏡最適化、観測装置、研究体制、国際協力などである。

(2) 関連グループとの協力で進めるもの

A) 技術シンポジウム

B) シュミットシンポジウム

C) その他

ハ) 各WGの活動

(1) 体制WG

- ・ 国立研の運用についての提言
- ・ 全国共同利用体制の具体的検討
- ・ 大型望遠鏡と国内観測体制、海外望遠鏡利用との関係
- ・ 計算施設の共同利用についての検討

(2) 望遠鏡WG

- ・ 観測装置の選定と提案
- ・ 望遠鏡の仕様の検討
- ・ ドーム構造の最適化の検討
- ・ サイトテストの支援
- ・ 技術検討情報の流通

(3) 国際協力WG

- ・ ハワイとの協力のあり方についての検討
- ・ 日米科学協力事業の推進
- ・ 日英技術交流の推進
- ・ 海外観測および国際的研究協力の推進

(4) ユーザーズコミッテ

- ・ 岡山・木曾のプログラム編成と共同利用について
- ・ 装置・技術開発について検討と推進
- ・ 岡山ユーザーズミーティング開催

ニ) PR活動

大型光学赤外線望遠鏡ばかりでなく、光学、赤外線観測に関する幅広い面での推進を計る。そのため、全体的な計画を各方面に認識してもらい、積極的な支持が得られるようなPR活動を行なう。また、国際的な理解を深める努力をする(早い時期に英文パンフレットを作成)。

II. 第43回 運営委員会記録

日時 : 1987年4月21日 13:30-

場所 : 東京大学理学部天文学教室会議室

出席者: 磯部秀三、岡村定矩、兼古昇、小暮智一、小平桂一、田中濟、田村真一、佐藤修二、西村史朗、舞原俊憲、若松謙一、(沖田喜一)

II-1 諸報告

1) 東京天文台改組について(小平)

- ・ 将来計画委員会が解散し改組準備室、改組調査委員会が発足した。
- ・ 共同利用研としての概算要求の準備をすすめている。共同利用経費、予算定員(総数は変えない範囲で)、3部門の新規要求、建物、宿舍等の検討を行い、まとめの作業を行っている。
- ・ 基礎開発費として5年ぐらいのタイムスケールで共同利用観測装置の要求を3つぐらい出す。たとえば、ガイド、アクイジション等。
- ・ 東大理学部との話は、3部門を残す。それに木曾観測所をつける。一応理学部はOKだが天文台側の事情もありツメはまだである。6月までには決定する必要がある。
- ・ 光学赤外に関しては今まで以上にサポートする。
- ・ 技術系組織についてはまだ煮つまっていない。予算要求までには、ツメなければいけない。
- ・ 実験工場、計算施設の問題も残っている。
- ・ 国際共同研究に関する経費については、まだ充分検討されていない。

2) 各WG報告

会報No. 44に報告されているような活動がなされたことの報告があった。

3) 1987年度光学天文連絡会の活動報告案の検討がなされた。総会までに決定稿を作成する。

4) 1987年度光学天文連絡会の活動方針案の検討がなされた。今年度は運用体制、観測装置に関しては、概算要求時に方針決定する必要があり、そのための検討が急がれるとの認識があった。

5) 会務報告(田村)

1986年度の会務報告案が提示され了承された。また、会計報告(中間報告)も行われた。会費未納が25%近くあることも指摘された。総研の援助についても検討がなされた。

II-2 次期体制について

- ・ 事務局は東京天文台岡山天体物理観測所が引き受けることになり、事務局長・清水実、庶務・渡辺悦二、会計・沖田喜一が行うことになったとの報告があった。委員長は引続き、小暮智一氏を推薦することになった。各WGのメンバーは次のように決定した。(○印は世話人)

望遠鏡WG : 田中濟(○)、舞原俊憲(○)、岡村定矩、平田龍幸、田村真一、兼古昇、辻 隆、佐藤修二、野口邦男、山下泰正、小林行泰、西村史朗

体制 WG : 関宗蔵(○)、安藤裕康(○)、石田愚一、大谷浩、尾中敬、小暮智一、若松謙一、佐々木敏由紀、舞原俊憲、兼古昇

国際協力WG : 寿岳潤(○)、田村真一(○)、家正則、磯部秀三、石田愚一、大谷浩、小倉勝男、小平桂一、佐藤修二、山崎篤磨

ユーザーズ・コミッティ：兼古昇（○）、前原英夫（○）、石田憲一、齊藤衛、定金晃三、田村真一、谷口義明、西村史朗、平井正則、山下泰正、若松謙一、佐々木敏由紀

・総会議長は平田氏にお願いすることに決定した。

II-3 その他

・小平氏より1987年3月にハワイ大学天文研究所にて"OSDA", "SUBLEASE" 草案についての意見交流を行った際の報告があった。

・国際協力に関して、日米協力、日英協力の話が紹介され、意見交換をおこなった。この問題に関しては学会の前夜、懇談会を開いてもう少し議論することが確認された。

(2) 関連グループとの協力で行なうもの

A) 技術シンポジウム

B) 天体観望の普及活動

C) その他

(2) 観望会WG

観望会の定数と構成

観望会の仕事の検討

(3) 国際協力WG

ハワイとの協力のあり方についての検討

日米科学協力事業の推進

(4) ユーザーズコミッティ

岡山・木曾の天体望遠鏡の設置と技術開発について検討と推進

(1) 観望会WG

観望会の定数と構成

観望会の仕事の検討

(2) 国際協力WG

ハワイとの協力のあり方についての検討

日米科学協力事業の推進

(3) ユーザーズコミッティ

岡山・木曾の天体望遠鏡の設置と技術開発について検討と推進

III. 運営委員会懇談会 会談メモ

日時：1987年5月11日 19:00-21:10

場所：京都大学理学部宇宙物理学教室会議室

出席者：磯部秀三、岡村定矩、小倉勝男、小暮智一、佐藤修二、寿岳潤、田中濟、田村真一、辻 隆、西村史朗、平田龍幸、舞原俊憲、(太田耕司、渡辺悦二)

懇談テーマ：国際協力推進について (座長；田村)

1) ハワイ大学 2. 2mのタイムシェアについて。

1987年3月に小平氏がハワイ大学を訪問した際に、JNL T完成前でも、日本との協力という観点から UH 2. 2m, 24-inch 等の望遠鏡について、一定の共通経費を日本側に負担してもらうことにより、その観測時間の一部を日本側に提供してもよいという申し出があった。観測時間の10~15% (30日~40日) 程度というものであるが、共通経費負担分がいくらになるか、日本側はどのような経費の支出になるか研究すべき点が多い。しかしながら光天連としては関心のあることなので、実現する方向で関係者に検討してもらう。

2) 日米技術協力

もともと、ハワイ大学から持ち出されたものであるが、古在氏、D. Hall氏が代表となり赤外を主として、JNL Tを目指した観測機器の Concept design 等を行う。まず人の往来をはかる。

3) 日英協力

イギリス側はJNL Tと協力関係をむすびたいと考えている。 Faint objects 用観測機器に興味を持ち、協力する意向がある。

4) エジプトとの技術協力

今まで、JICAの援助の下にエジプトとの技術協力をすすめてきたが、今後どうするか検討する余地が多々ある。

- ・ヘルワン天文台は年間300日近い晴天に恵まれている。
- ・今までのような技術協力を Academic Project にすることは出来ないか？
- ・イギリスは手を引いた。
- ・日本はどうするか。
- ・北村氏、清水氏の世話人としての役割は西村氏に移行しつつある。

5) 各国からのJNL Tについての資料請求がある。英語の資料作りをする必要がある。〔光天連のパンフレットを作る。〕例えば、IAU Colloquium No.108 において利用する。

1) 今年は技術シンポジウム、岡山ユーザーズミーティング、(文責 田村真一) 岡山で開催します。(8月25~28日)

2) 東京天文台改組の構想案が事務局に用意してあります。希望者はお申し出てください。

3) 今年度の会費をまだ納入してない方には振替用紙を同封しました。よろしくお願ひします。

IV第44回 運営委員会報告

日時：1987年5月12日 第10回総会終了後

場所：京大会館 第一会場

出席者：小暮、平田、田村、舞原、磯部、岡村、西村、田中、小平、安藤、関、清水、沖田、渡辺

- 1) 次期会報について
- 2) 東京天文台改組構想素案の取扱について
- 3) 次期運営委員会の開催について(予定6月27日於・東大天文学教室)
- 4) 体制ワークショップについて(ハワイ、大学院問題など)
- 5) 院生より申し込みのあった「院生をWGにいれてほしい」件について
泉浦(東大理)、太田(京大理)を望遠鏡WG, 体制WG, どちらにも入ってもらうことにした

V. 会員の移動

新入会	武市盛生	〒431-32	浜松市常光町812番地 浜松ホトニクス(株)	0534-35-1771
	林 正彦	〒113	東京都文京区弥生2-11-16 東京大学理学部天文学教室	03-812-2111
	高遠徳尚		〃	
	坪井昌人		〃	
	斯波尚志		〃	
	面高俊宏	〒890	鹿児島市郡元 鹿児島大学教養部物理教室	0992-54-7141 内5791
	坂上 務	〒810	福岡市中央区大名2-1-41	092-741-5691
	伊東昌樹	〒606	京都市左京区北白川追分町 京都大学理学部宇宙物理学教室	075-751-2111
	佐藤哲也	〒044	北海道虻田郡倶知安町旭15 北海道倶知安農業高等学校	
	富田憲二	〒725	広島県竹原市竹原町1294 広島大学理論物理学研究所	
	松本信二	〒160	東京都新宿区本塩町22 カール・ツァイス(株)天文機器	03-355-033
退 会	成相秀一			
移 動	谷口義明	〒399-56	長野県木曾郡上松町小川1935 東京天文台木曾観測所	026452-3360
	亀谷 修	〒384-13	長野県南佐久郡南牧村野辺山 東京天文台野辺山観測所	0267-981-2831
	半田利弘		〃	
	浜島清利	〒460	名古屋市中区橋1-16-5 内山ビル403	
	仲野 誠	〒870-11	大分市旦野原700 大分大学教育学部地学教室	
	大道 卓	〒206	東京都多摩市豊ヶ丘2-15-3-504 自宅	0423-72-5089
	林佐絵子		United Kingdom Telescopes 665 Komohara Street Hilo, Hawaii 96720, U.S.A.	telex 633135
海外渡航	磯部瑋三	1987年6月11日-7月17日	メキシコ サン・ペドロ天文台	
	馬場直志	〃	〃	
	野口本和	〃	〃	

VI 掲示板

- 1) 今年は技術シンポジウム、岡山ユーザーズミーティング、シュミットシンポジウムを岡山で開きます。(8月25~28日)
- 2) 東京天文台改組の構想素案が事務局に用意してあります。希望者はお申し出てください。
- 3) 今年度の会費をまだ納入しておられない方には振替用紙を同封しました。よろしくお願ひします。